

庭の方位 Ⅲ

庭園文化研究分科会 宇野 真一

1. はじめに

この3年間で20か所近くの庭園を訪れたことになる。個人宅の庭はほぼ例外なく南側に設けられているが、寺院の庭ではそのような特徴は見受けられない。理由は庭と座敷との関係性に見いだせるのではないだろうか。2年前のレポートで述べたように、書院造という建築様式によって座敷>床の間>上座下座が成立し、主客の固定化した視点から眺める空間として庭が作られるようになる。時期は鎌倉以降と思われるが、この固定化した視点と庭の関係性は現在も同様である。(表1. 参照)

表1. 日本庭園の変遷

時代区分	機能	特徴	事例	備考
縄文・弥生	まつりの場	葬送儀礼、自然畏敬	ストーンサークル	
古墳時代	祭祀空間	強大さの象徴、水利・灌漑、美意識?	前方後円墳(方丘)、水辺祭祀	
飛鳥時代	天皇祭祀	幾何学的平面の池、石積み護岸、石造物	酒船石遺跡など	日本書紀・路子工
奈良時代	貴族階級による儀式・饗宴の場	不整形平面の池、州浜、自然石の石組み	平城京跡の庭園遺構	遣唐使
平安時代	宮廷貴族による儀式・饗宴の場	寝殿造の成立に伴う寝殿造庭園、浄土庭園	神泉苑、平等院、毛越寺庭園	前栽秘抄(作庭記)
鎌倉・室町	境致(伽藍一帯の優れた景観)	環境美の創造、眺望を活かした造形や石組み	建長寺、西芳寺、	蘭溪道隆、無窓疎石
戦国・安土桃山	会所・書院からの眺め	書院造の確立(=視点の固定化)、書院造庭園	東山殿、龍安寺、二条城二の丸	枯山水の成立
	茶室に到る庭園空間	書院→草庵→侘茶、露地の成立	待庵、燕庵、孤篷庵・忘筌	利休、古田織部、小堀遠州
江戸時代	上流武士階級の社交の場(回遊式)	池庭、露地・枯山水の統合化	桂離宮、修学院離宮、小石川後樂園	大名庭園
近代	新興有産階級の新たな価値観	写實的、自然主義式庭園	無鄰庵、三溪園	小川治兵衛
現代	芸術・環境としての庭	石組の象徴性、環境・建物との調和	東福寺方丈南庭、等々力溪谷公園	重森三玲、飯田十基

2. 庭の方位について

農村地帯の民家を原型とする個人宅の場合、座敷は日当たりのよい南側に設けられるため、座敷から眺められる庭も必然的に敷地の南側に配置される。また、原鹿の旧江角邸のように座敷を西側に拡張した場合、庭園も同じく西に拡張される。いずれにしても庭は南～南西～西に配置される。出雲流庭園も基本的には同様である。

一方、南北軸にそって金堂や講堂を配置することが多い寺院では敷地の南側は参道や池で占められ、書院と庭はそれ以外の方角に配置されることが多い。とはいえ広大な敷地を有する寺院の場合は建物を東西方向に配置することも可能であり、禅寺に見られる白露地（はくろじ）は儀式空間としての庭を継承するほぼ何も無い空間だが、方丈に面して南側に配されている。



図1. 原鹿旧江角邸庭園

3. 露地について

露地とは茶室を「市中の山居」のように演出するよう生み出されたアプローチ空間である。ならば座敷で茶席を行うために飛石を打ち手水鉢を配して露地を設けたと考えられ、おそらくは不昧公を招くための趣向として豪農・豪商屋敷にだけ許された作庭手法だったと解釈できる。そして明治以降に作庭を許された富裕層には豪農・豪商屋敷を手本とすることで広まり一般化したのだと。

しかし疑問もある。露地が露地らしくないのだ。木戸をあけて足を踏み入ると山中に入り込んだかのような演出があってこそ露地である。出雲流庭園にも飛石・手水鉢といった道具立てはあるが「市中の山居」を意識していないことは明らかである。

そこで思いつくのが鱈淵寺や雲樹寺にあった勅使門である。貴族や僧侶といった位の高い人々を屋敷に迎える場合、日常使用している玄関からではなく、勅使門から庭を通り靴脱ぎ石から座敷に上がってもらう。「ハレ」と「ケ」で言えば座敷が「ハレの出入口」、玄関が「ケの出入口」である。一時代前までなら一般住宅でも嫁入りや出棺は座敷からのはずだ。

中門から座敷へと続く飛石と靴脱ぎ石の横に置かれる手水鉢は、「ハレの出入口」である座敷へのアプローチ空間を演出するために露地の道具立てを用いていると考えたほうが実態に近いと考えられる。



図2. 鱈淵寺の勅使門とアプローチ空間

4. 庭先の蹲（天水）

座敷や茶室に入る前に手を洗い口を濯ぐという機能は蹲も手水も同じである。出雲流庭園でも靴脱ぎ石の横には手水が置かれている。問題は蹲である。玄関先と庭の境界で、しかも飛石を挟んで座敷とは反対側に置かれているのだ。自宅を寺社になぞらえるわけも無く、身を清めるという蹲本来の機能を目的とはしていないであろう。

では何のために？ 蹲を座敷から見ると月が昇る方角（東）に置かれている。おそらくは月を浮かべるための水盤であろう。そう考えると出雲流庭園に置かれている 4～5ton はありそうな自然石の大きさや形状も理に合っていると思う。



図 3. 手水（安来松源寺）



図 4. 蹲（天水）